Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2007, Vol.17, 247-255

論 文

実践的な指導力を備えた教員の養成に関する研究
―教育学研究科共通科目「教職特論Ⅰ」の検証を通して―

隈　元　浩二郎〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕
下　野　浩　二〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕
大久保　直　志〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕
田　宮　弘　宣〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

A Study of Teacher Development for the Practical Instruction: A Review of "Teaching Profession Study I" in the School of Graduate Studies, Faculty of Education

KUMAMOTO Kojiro・SHIMONO Koji・OKUBO Naoshi・TAMIYA Hironobu

キーワード：実践的指導力、教員養成、校内研修、到達目標

1　はじめに

改正教育基本法をはじめ，近年の中央教育審議会を中心とした答申において，教員の学習指導や生徒指導などにおける力量形成や資質の向上を目指した系統的な教員の養成や教員研修の改善に向けた取組が強く求められている。

今期，本学部教育学研究科の共通科目として開設された「教職特論Ⅰ」は，これまでの中央教育審議会等の答申の趣旨を踏まえ，教職大学院の設置を視野に入れて試行的に取り組まれたものである。

そこで，本稿では，答申等をてがかりに実践的指導力を備えた教員養成の方向性について改めて確認するとともに，「教職特論Ⅰ」の取組の意義と，その概要，及び受講者アンケート等の結果から考察した本科目の成果等について述べる。

2　中教審答申等にみられる実践的指導力を備えた教員養成の方向性

教職員の力量形成等に関する改善を求める動きは，平成９年７月に教育職員養成審議会から提言された「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第一次答申）」に端を発している。ここでは，中央教育審議会から「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申・平成８年７月），（第二次答申・平成９年６月）」の中で前後して出された「ゆとり教育」や「完全学校週５日制」などをはじめとした新しい提言等を踏まえ，意図的・計画的なカリキュラムに改善することが求められた。

その後，平成16年10月には文部科学大臣が教員養成における専門職大学院の在り方と教員免許制度の改革，とりわけ教員免許更新制度の導入を中央教育審議会に諮問し，平成18年７月に「今後の教員養成・免許制度の在り方について」として答申が出された。

ここでは現行の教職課程に関する様々な課題が指摘されるとともに，これからの教員に求める資質能力についても提言されている。具体的には，教育実習の改善をはじめ，新たな必修科目として「教職実践演習」の新設，「教職大学院」の設置など，教職課程改善のモデルが具体的に示され，専門的職業である教職の重要性が再確認されている。併せて，近年の大きな社会の変動に伴う保護者や地域社会の学校や教員に対する大きな期待に応えるためには，教師自らがこれまで以上に豊かな人間性を育むとともに，幅広い教養や見識を備え，揺るぎない専門性に支えられた実践的指導力や教員としてのたゆまぬ研鑽を積み重ねることが求められている。

また，大学院における教員養成においても，学校現場での実践力・応用力など，教職としての高度の専門性の育成という観点からみて，その機能を十分に果たし切れていないことが指摘されており，実践的な指導力を備えた新人教員やスクールリーダーの養成が期待されている。とりわけ，教

職大学院においては焦点化して養成すべき資質能力として，解釈力や診断力，企画力，実践的な展開力，評価力などを挙げ，これらを総合的にマネジメントしながら業務を遂行できる能力などの向上が求められている。

3　「教職特論Ⅰ」の取組の概要

実践的指導力を備えた教員養成を具現化するためには，受講者が身に付けることで学校経営の視点に立ち，実態及び現状を解釈・診断できること，開発的な企画運営力を発揮できること，同僚及び地域内の他校の教員，家庭・地域社会への指導力を発揮できること，そして自らの取組を実地に検証し評価できることなどが必要である。

そのため，本科目では教員研修の一つである「校内研修」を企画・実施することを活動の中心に据え，受講者を「研修主任」という企画運営の主体的立場に置いた。また，研修内容としては，学校教育の喫緊の課題であるいじめ，不登校，暴力などの心理的な問題を取り上げた。

受講者には多様な立場が考えられるが，今回は現職教員を中心にしながら，学部卒院生や留学生も一緒に講義・演習等を受け交流を図りながら進めることになった。

以下，シラバス等に基づき，具体的な取組内容を述べる。

(1) シラバス及び活動内容

○　シラバス

教育工学・心理臨床・授業研究等の立場から，教員及び教育現場の課題，さらには受講する大学院生の課題を踏まえた課題解決型のプロジェクト研究を，いじめ・暴力などの問題，授業研究・研究授業の在り方，臨床的理論と実践，学校における教育工学の活用等，多様な事例を基に多面的な研究的実践的アプローチを行う。

○　活動内容

活動内容としては，教員に必要な実践的スキル，そのスキルの意味付けや説明理論・背景，及び現場における実践活動を想定した研修モデル案の作成で構成される。この内容は後期「教職特論演習Ⅰ」における学校現場での実地検証及び評価に発展する。（本科目はⅰ・ⅱ）

ⅰ）教員研修のモデルプランの作成（ニーズの捉え方，プランニングの手法，実施校との調整方法など）
ⅱ）受入れ学校との連携（学校のニーズの把握，実施上の具体的なプランニングなど）
ⅲ）研修の評価（具体的な評価・検証の在り方，結果の分析・考察など）

(2) 開期、受講者等

・前期，火曜日，第６時限目，15回実施
・受講者の構成
　現職教員（Ｍ１－５人，Ｍ２－３人）
　学部卒院生（Ｍ２－１人）
　留学生（Ｍ１－２人）

(3) カリキュラム

対面式及び担当者紹介等を除く13回の授業を紹介する。

回	期日	内　　容
1	4/10	**○講義ガイダンス** ・ねらい：主に現職教員を対象とした教職大学院の授業を実験的に構築すること。 ・内容：研修主任の立場に立ち，心理的な問題を中心にした効果的な校内研修の企画立案の在り方について実証的研究の手法を学ぶ講座にすること。 ・計画 ①　校内研修推進上の課題等の整理 ②　実効性の高い校内研修の在り方 ③　いじめ等の理解の深化，スキル ④　受入校の実態把握と解決策への課題，対応策等 ⑤　校内研修モデルプランの構築
2	4/17	**○「教職大学院のカリキュラムイメージ」（文科省）に関する意見交換** ・高度な専門職としての教員を養成する教職大学院のレベル確保のためのスタンダードと，地域の特性に合った特色あるカリキュラムという独自性（オリジナリティ）が求められている。

		・大学教員と実務家教員が理論と実践に安易に分担されず，相互に積極的にかかわり合うことで高度な資質能力を備えた教員の養成を実現しようとしている。
3	4/24	**○プロセス重視について** ・心理学の創始者ヴント　要素主義 ・ゲシュタルト心理学 ・行動主義　　結果の重視 ・現在の認知心理学 　プロセスとエビデンスの両方重視 **○傍観者効果について**
4	5/8	**○構成的グループエンカウンター** ・三つの目的（自己肯定感，つながり感，ソーシャルスキル） ・時事問題 　事故発生に係る意識やストレス 　事故の再発防止策
5	5/15	**○心理と生理** ・精神状態と血圧，筋肉，呼吸の関係 ・ＧＰＳ（うそ発見器）の実験 ・自律訓練法 　精神的作用でコントロール
6	5/22	**○ＰＦスタディ** ・１枚の絵に入れる吹き出しで判断 外罰（他罰）型，内罰（自罰）型，無罰型の類型 ・孤立するクレームの頻発する親 　人間関係の支障により他者との意思疎通を図ろうとする。関係性を高めることにより結果的に欲求不満耐性を高めることが有効。 ・アサーションスキル 　話し合いで合意するスキル。クレーム場面に弱い日本人。欲求不満耐性による攻撃に対し，欲求不満や本人のプライドの理解，望む防衛機制の方向を踏まえたストレス回避及び低減。 **○判例に学ぶいじめへの対応** ・学校の安全注意義務違反と保護者の保護監督義務　両者の責任を再認識 ・誹謗中傷による侮辱罪，名誉棄損
7	6/12	**○心理学事例研究に学ぶ** ・症例研究（その患者に対する研究） ・事例研究（クライエントと治療者の関係の研究。多様な見方・考え方で事例への理解を深める。） ・対策委員会（一般化，方向性，対策検討，共通理解） ・教育センター対応事例に基づく研修
8	6/19	**○保健室登校の指導の在り方** メンタルな側面からかかわりをもつ養護教諭の役割の明確化 **○心理臨床のかかわり** 　治療的かかわり（危機介入） 　予防的かかわり 　開発的かかわり（アサーションほか） 　その他（クレペリン検査ほか） **○学校実地研修に向けての研修の在り方の検討** ・因果に拘るより今後どうすべきかを考え行動することこそ大事であること ・多角的な検討ができる研修（地域社会学，法律学，情報教育，心理学など）
9	6/26	**○教師のメンタルヘルスにつながる校内研修** ・カウンセリングマインド ・構成的グループエンカウンター ・ストレスマネジメント ・アサーションスキル，ピアサポート
10	7/3	**○公立中学校の校内研修推進に関する事例発表** ・総花的な計画→実態に即して見直す ・研修テーマを知育プロジェクトと徳育プロジェクトで検討 ・接遇や危機管理のプロジェクト化で校内研修を活性化 ・臨時校内研修で卒業式全員合唱提案 　個々の課題意識から学校全体へ ・年間3回は全教職員参加の授業研究 ・ボトムアップ効果→学級通信の増加 **○校内研修に関する資料の意見交換** ・教員の教育力を高める校内研修 ・切実感のある個別課題解決こそ重要

		・課題プロジェクトを該当教員が担当 ・協働性，課題解決型の学校運営へ
11	7/10	**○ＩＣＴ活用指導力の向上** ・校内研修の課題の焦点化を図る事前調査用自己評価チェックリストの活用 ・教職員の多様なレベルに対応できる校内研修へ。事後評価にも活用可。 **○バズセッション** ・効果的な校内研修とはどのようなものか ・校内研修のアイデア，発想（課題，方法論，ほか）
12	7/17	**○バズセッションを受けての校内研修プラン検討（続き）** ・ＫＪ法によるカテゴリー化 カードを構造化する方法 直線（１次元）に並べる方法 座標軸（２次元）におく方法 ウェブ図の方法 ・グループにおける研修プラン検討
13	7/24	・テーマ別グループ発表と意見交換 ①　小･中･高連携グループ ②　特別支援教育グループ（日常的な相互研修）

(4) 校内研修に関する受講者の意識

前半が研修内容の基盤・背景となる知識・理論，演習，11回以降は研修モデル作成に向けた演習が主となった。実践的指導力に関わる受講者の意識をみるため，11～13回について詳述する。

ア　第11回〔バズセッション〕

前回までの内容を受け，受講生一人一人が研修主任という立場に立ち，校内研修の企画立案者として，自分の考える「効果的な校内研修」像をバズセッションで交流し合う場が設定された。

受講者の反応を，教職大学院のめざす３観点をもとに以下のように整理した（数字は整理番号）。

(ｱ) 教員が個人として児童生徒に対し指導できる力量に関する内容

1　性教育
2　命の教育の授業
3　楽しくてよく分かる授業
4　掃除指導
5　ＩＣＴの活用

(ｲ) 同僚教員や学校の教員集団全体に対し助言，説明，及び生産的な議論などができる力量に関する内容

6　事前に校内のニーズを把握して研修設計を立てる姿勢
7　研究授業への授業前からのかかわりの研修
8　生徒指導，進路指導に関する研修
9　ＩＣＴの活用
10　ＩＣＴに対峙するチョーク１本で成立する授業
11　ＰＩＳＡ型読解力の確認と小中高の授業づくり
12　教職員の人間関係－構成的グループエンカウンター
13　命の教育の共通理解と授業づくり
14　校内研修のテーマ設定，研修の進め方
15　掃除指導の方法
16　人間関係の構築に役立つ研修
17　保護者への対応（クレーマー対応など）
18　子どもとのかかわり方
19　「子どもにとっての喜び」に関する研修
20　教員の見られ方
21　多様なジャンルの講師を多く呼ぶ研修
22　地域人材の活用
23　学生から教師への意識変化の調査・分析
24　テスト問題の作成の仕方に関する研修
25　楽しく学べ，役に立つ研修
26　認識や見方・考え方が変わる研修
27　楽しい，待ち遠しい，ニーズの高い研修
28　方法的なものを学べる研修
29　共通理解し，機能化・機動性につながる研修

(ｳ) 所属学校の教育力を地域の学校全体の教育力充実に生かすため，俯瞰・整理，情報交換，建設的な議論などができる力量に関する内容

30　小中学校の教科書及び学習指導要領の変遷

31　各高校のレベルに応じた情報教育研修会
32　校種を超えた情報教育の研修会
33　小中の認識の差を埋める生徒指導合同研修
34　ＰＩＳＡ型読解力の確認と小中高の授業づくり
35　性教育
36　命の教育の共通理解と授業づくり
37　ＩＣＴの活用
38　地域人材の活用
39　シンポジウム形式の校内研修
40　異校種の教育課程に関する研修
41　やすらぎや癒しが得られる研修

(ｴ) そのほかの内容（教員の自己研鑽，教養など）

42　教育改革等の教育政策の歴史的な変遷
43　研究の仕方を学ぶ研修
44　子どもに学ぶこと
45　人生の楽しみ方
46　自己のキャリアアップにつながる研修
47　ＩＣＴの活用
48　ＩＣＴに対峙するチョーク１本で成立する授業
49　スーパーティーチャーの授業による研修
50　ストレスマネジメント
51　知識や教養が高まる研修

バズセッションでは，51個の多種多様な意見が出されたが，これは自由な発想を引き出すため，講座担当者が意図的に「効果的な研修とはどのような研修か」という幅の広い課題を与えたことによる。

観点別でみると，(ｱ)教員個人の力量に関する項目は５個，(ｲ)同僚や集団への助言・説明等の力量に関する項目は29個，(ｳ)地域の学校全体の充実に生かす力量に関する項目は11個，その他の項目は11個となり，(ｲ)に対する意識が最も高いことが分かった。

(ｲ)の内訳では，「11　ＰＩＳＡ型読解力」「17　保護者のクレーム対応」など現代的ニーズに関する内容や，「13　命の教育」「19　子どもの喜び」など不易のものに関する内容など研修内容に関する項目が13個，「７　研究授業以前からのかかわり」「21　多様な講師の招聘」など研修方法に関する項目が３個，「６　事前のニーズの把握と研修設計」「14　研修テーマの設定方法」など企画運営に関する項目が２個，そのほか「25　楽しく学べ，役に立つ研修」「29　共通理解し，機能化・機動性につながる研修」など望ましい研修像に関する項目が５個となっている。

こうした現職教員の意見から，学校現場での多様な経験を基に現状や課題を客観的に診断・分析し，日常的でなおかつ多様な諸問題の解決につながる実効性の高い校内研修を強く志向している様子がうかがわれる。

イ　第12回〔ＫＪ法〕

ここでは前回のバズセションを受け，各意見を１枚１項目ずつカードに整理し，ＫＪ法によるカテゴリー化が行われた。

カテゴリー化に当たっては，講座担当者から構造化を図る手法として、直線型（一次元的)、座標型（二次元的)、Web図型などの並べ方が紹介された。また，それぞれのカテゴリーの中で距離感も大事にすること，意外性のあるものに着目することなどの助言もなされた。

（写真１）「カードのカテゴリー化を行う受講者」

このようにして作業を進めた結果、研修企画モデルのグループを「教師の知識向上グループ」と「連携グループ」の二つに絞った。各グループでは，更にカードをもとにバズセッションが行われ，効果的な研修企画案の検討が行われた。

ウ　第13回〔課題別グループ発表〕

ここでは，各グループが作成した校内研修モデルプランを発表し合った。その概要を紹介する。

① 連携グループ

テーマ「小中高連携に関する研修について」
〈基本的な考え方〉
ⅰ）相互の取組の共通理解とそれぞれに成果を活かす努力が必要
例：学校経営や教育課程の共通理解
授業参観・授業研究　など
ⅱ）共通テーマの設定、協働的な実践が必要
例：協力授業の実践（実態把握、教具作成）
合同校外補導の実施　など
ⅲ）継続的な研修、日常的な連携へ
例：連絡会の計画的実施
各教科、領域別の委員会実施　など
〈実践事例〉
「中高一貫校における研修の必要性」
・スクールリーダーの育成
・地域に密着した課題把握→内容へ
・連携強化のための内容へ（教育課程、統廃合など）

発表の中では「教育内容の厳選の結果，校種間の教科指導の系統に一部支障が生じている点は，校種を超えて協議する中で初めて認識できる。合同研修及び共通理解の場の大切さを改めて感じている。」との意見も出された。

連携グループが提案した「各学校が相互理解を深め円滑な教育連携をどう図るか」という視点は，教員が所属学校だけでなく地域全体の教育の充実に貢献する際の重要な力量形成への鍵となる。ⅰ～ⅲ段階の内容は抽象的レベルではあるが実践的な手続きであり，かつ多様なテーマにおいて実行可能なものであると言える。

（写真２）「研修モデルの発表会風景」

② 教師の知識向上グループ

テーマ「全職員の積極的な生徒指導実践を目指した校内研修とは」
〈校内研修の現状及び課題〉
・ 研修内容が多く研修時間が不足がち
・ 児童生徒への還元できる内容で研修を吟味
・ 研修担当の負担が大きい　など
〈授業づくりを深める校内研修の組織づくり〉
・ 不定期でインフォーマルな日常的授業公開
・ Ａ４指導案のピアレビューピアコーチング
→参観者から付箋による批正や指導
→管理職による指導（適宜）
→日常の授業公開が家庭での取組へ広がる
〈取組への期待〉
・ 職員間の張り、支持的風土の醸成
・ 主張のある授業と責任ある意見交換
・ 授業力の要素を認識した実践の蓄積
〈実践事例〉
・ 通常学級における特別支援（個別指導）
→担任の「困り感」へ投げかける取組
→注入型研修からコーチングスタイルへ
→通常学級担任との双方向のコミュニケーションが可能に
・ 診断名や障害名で判断せず子供固有の課題として理解することの大切さ
→「ちゃんとしなさい」から型を示す指導へ

意見交換では，インフォーマルな型の日常的な公開授業の場に入れない教員への配慮が必要なこと，授業研究での批判をネガティブに受け止める学生が増加傾向にあることなどが出された。

教師の知識向上グループが提案した「日常的な授業公開によるピアコーチング型の研修」という視点は，研修時間の不足，還元性の高さ，研修担当者の負担軽減等の改善を図るだけでなく，ボトムアップ型で双方向性のある相互研鑽が日常性の中に営まれる点に特色があると言える。

教員研修を日常的な場で行うことは，計画的な校内研修以上に，同僚教員や学校の教員集団全体に対する働きかけの力量が求められると予想される。この視点を提案された発想を各学校の校内研修にどのように生かし改善を図るかが今後の課題と言える。

4　受講生のアンケート結果からみた実践的指導力に関する考察

「教職特論Ⅰ」の前期終了時に，受講生にアンケートを行った結果，以下のような感想・意見等が得られた。受講者からのアンケートはデータとして分析するには数が少なく，今後の在り方・方向性を定めるのに十分な資料とは言えないが，全体的にはそれぞれが直面する教育課題の理論的な背景や構造的・総合的な理解が深まり，満足感や効力感などが得られたものと思われる。このアンケートと併せて，受講時の様子や反応も踏まえながら，実践的指導力の育成という観点から考察することにする。

①　これまでの講義・演習の中で，特に参考になったと思う内容

- 事例研究会の効果的な進め方
- 保護者への対応～クレームの心理学を通して保護者の心情の理解を深められた。
- 傍観者効果（社会心理学の研究から）
- 民事訴訟判決資料を活用した研修
- いじめ問題に関すること
- 教員の教育力を高める研修の工夫と創造
- ＫＪ法に関する研修
- 情報活用指導力の向上に関する取組

前半は，校内研修で活用できる内容等の提示という形で講座を実施してきたが，示された内容等についての理解が図られるとともに，校内研修で活用してみたいという事項を受講者それぞれが感じていたようである。一つには，症例研究と事例研究の対比からみた事例研究の在り方やクレームに関して心理学的考察から考える保護者への対応の在り方など，心理学の観点から取り上げた内容への関心が高かった。また，「いじめ」をめぐる民事訴訟の判決資料をもとに教師の対応・保護者へのかかわり方を考える内容も，初めて触れるものでもあり，興味を引いたようである。同じ課題を取り上げるにしても，新たな切り口から迫る視点を持って校内研修を企画することは実践的な指導力の向上においても重要であると言えよう。

②　これまでの講義・演習の中で，校内研修において効果的に活用できると思う内容，方法

- 全職員で校内研修を企画する方法
- 構成的グループエンカウンター
- アサーションスキル
- 民事訴訟判決資料（いじめの予見性等）
- 教師集団のネットワークづくり
- ＫＪ法を活用した研修計画

校内研修に関して，現職教員の場合は，これまで経験してきた校内研修における問題点，特に研修内容や方法の固定化・マンネリ化の傾向を改善したいという思いがあると考えられる。内容的な面については上記の①で述べた新たな視点での切り口と重なる点が多い。方法面でみると，よく行なわれているのは，係からの提案をもとにした研修や招へい講師による講義的な研修である。しかし，本講座を通じて，いろいろな方法があることが提案され，その理解が図られると同時に，自分の学校でも試してみたいと感じた受講者が多かったようである。中でも，ＫＪ法の活用などによって企画・立案に全職員がかかわったり，構成的グループエンカウンターやアサーションスキルなど体験的に学んだりする方法は関心が高かったようである。実践的な指導力向上を目指す際，特に現職教員の経験などをもとに，現状の問題点を明確にしながら，その解決に向けて取り組む形で進めることが有効であると考える。

③　これまでの講義・演習を通して，あなた自身の校内研修に対する見方や考え方が変わった点

- 既成概念にとらわれ新たな見方・考え方がなかなかできない自分に気付いた。
- 形式化した研修ではなく少人数でなおかつ系統的に行う研修がよいと感じた。
- 例年どおりの企画提案しかできていないことに気付いた。学校や児童生徒の実態を踏まえ，児童生徒に生きる研修が必要だ。
- 各専門的知見に触れ多くの窓を持つことの大切さを感じた。
- 事例研究の定義や概念を再認識できた。
- 校内研修のマニュアルを中国でも実践したい。

児童生徒や学校が抱える課題は様々であり，その解決の努力もなされているところだが，校内研修を通じて，新たな見方・考え方で各職員がそれらの課題の本質を的確に捉えたり，解決の工夫を探ったりすることも重要である。その意味で研修内容の企画において「多くの窓を持つ」ことは，校内研修充実のための一つの要因になると思われる。校長・教頭はもちろんであるが，教員の中においても「多くの窓」を持って研修の企画等を進められるリーダー的な資質を培うことが重要であると考える。

また，感想にある留学生をはじめ，様々な校種の現職教員，学部卒院生が交流できるのもこの講座の特徴である。それぞれの立場での意見交換を充実させることが，本講座の意義をさらに高めていくと考える。

④　あなたの理想とする校内研修とは

- 全教職員が，主体的に参加できる研修（企画運営），学んだと実感できる研修（内容面）
- 問題意識を持ち問題解決のヒントが得られる研修（方法面），教職員としての自分を振り返ることができる研修（評価面）
- 学校や児童生徒の実態を踏まえ全職員が内容を共有して取り組む研修
- 自主的で職員の直面する課題に応える研修
- 時代の最新の情報が得られる研修
- 研修をコーディネートする教員を中心とした教員の資質向上を図る研修
- 教員間の温度差（資質，士気など）の差を縮める効果が期待できる研修
- 多面的に検討するシンポジウム型研修

（例：いじめ問題を心理学，教育社会学，教育工学的な側面から検討するなど）

学校外での研修の機会として，自主的な研修はもちろん，教育委員会や教育センターの研修会などいろいろな機会があるが，学校内で研修が行わる意義の一つは，生徒の実態を把握し，課題を共有している者同士での研修という点である。その意味で，課題の解決方法や研修結果の活用が目に見える形でとらえられたり，日々の実践に具体的に生かせたりすることは重要なことであり，受講者が理想とするのもその点につながるものが多い。今後の講座の進め方にもかかわるが，校内研修の模擬的な企画・実施の場合であっても，その研修によって，参加者がどのような成果を手にできればよいのか，到達目標や成果の見通しを持ちながら企画・実施に取り組むことが，校内研修の充実につながるとともに，実践的な指導力の向上を図る上でも大事な点になると考える。

⑤　今期「教職特論Ⅰ」に関するご意見・感想，または後期「教職特論演習Ⅰ」に対する要望

- 養護教諭としての専門性を研修に活かしたい。
- 講義・演習の最終目標をオリエンテーション時に示していただきたい。
- 最終のグループ発表までにもう1時間，準備の時間がほしかった。
- 後期の時間設定についてはM2の方や夜間履修の方に配慮を。
- 教職大学院のヒントが得られるものへ。
- 教職特論～分野に偏らず、「教育改革」等のテーマに基づくディスカッション方式。
- 後期演習～教育実習との区別化を。社会教育施設や県教育庁などの訪問も必要。
- 学部卒院生には校務分掌の経験もいいのではないか。

まず，本講座の最終目標が受講者に分かりにくかったという点は，十分に受け止めていきたいと考える。オリエンテーション時に，担当者から講座のねらい・全体的な見通しは説明したところであるが，その後の展開や後期の演習・協力校での実践等とのつながりが部分的には理解できても，全体としての構造・見通しが見えにくかったということが原因ではないかと考える。

また，受講生が多様な立場であるということに関して，多様な意見交換がなされるなど効果的に生かせる点もある一方，多様な立場の受講者のニーズにどれだけ応えられるか，また，協力校へ出かけての実習など全員共通の時間での設定がどれだけ可能かなど，今後の展開の中で工夫していきたい点である。

5　成果及び今後の課題

これまで述べてきたように，今期から開講された「教職特論Ⅰ」では，前半は主に教育工学・心理臨床・学校管理の立場から具体的な事例に基づいて演習等を行い，そこで身につけた内容を基にして後半は校内研修の計画を具体的に構築してきた。

その中では，大学院１年生と２年生の交流をはじめとして，様々な立場の受講生の交流を図りながら講義・演習が進められてきた。

これらを踏まえ，実践的な指導力を育成するというねらいに即して「個々の学生の資質能力の向上」や「様々な立場の学生の交流」という面から本講義の成果と課題について述べてみたい。

【成果】

(1) 教育工学・心理臨床・学校管理の立場等，様々な面から事例が示され，討議，演習等が行われたことにより，個々の受講生が校内研修を企画・立案する上で必要な基礎的な知識や技法を数多く身につけることができた。

(2) 具体的な事例を通した討議・演習を行うことで，これまであまり問題意識をもつことがなかった校内研修に対して，総花的，単発的であったのではないかというような課題意識が芽生え，系統的な研修の必要性や企画立案者の複数化等，校内研修に対する新たな見方・考え方ができるようになってきた。

(3) 校内研修についての学習を継続的に行ったことで，受講生が校内研修における研修内容を数多く見いだすことができるようになると共に，それらを分類・整理しながら具体的な研修例を企画・立案することができるようになってきた。

(4) 講義・討議・演習を行う中で，小学校・中学校・高等学校・特別支援学校と様々な校種の現職教員と学部卒院生，留学生など様々な立場の受講生の交流，また，大学院の１年生と２年生の交流等数多くの意見交換が質・量ともになされ，互いの結びつきが強まるとともに，教育に対する他の受講生の様々な見方・考え方を感得することができた。

【課題】

次年度の「教職特論Ⅰ」や後期「教職特論演習Ⅰ」との関連を考慮すると，今後の課題として次のような点があげられる。

(1) 受講者が「教職特論Ⅰ」の最終ゴールである「効果的な校内研修の企画立案」を意識しながら，前半と後半の内容を修得し反映することができるようにカリキュラムを工夫する必要がある。

(2) 現職教員の院生に重点化された講義内容であったことから，学部卒院生，留学生など多様な立場の受講者に重層的に対応できるカリキュラムの在り方を検討する必要がある。

6　終わりに

本学においては，現在，実践的科目群の構築を中心とした学部の教員養成改革が進められている。今回の「教職特論Ⅰ」は教職大学院を視野に入れた取組であるが，今後求められる教員像について，学部と教職大学院において育てるべき資質能力の系統等はその延長上において軌を一にするものである必要がある。本学のめざす「地域に根ざした教員養成改革」の具現化に向けて，学部の改革と教職大学院の在り方を両輪として数多くの実践が重ねられ，よりよい教員養成カリキュラムの構築に努めたい。

引用・参考文献

１：今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）平成18年７月11日中央教育審議会